

問題 1

2 世紀のユーラシア大陸に関する以下の文を読み、下の問いに答えよ。

2 世紀のユーラシア大陸の東西には、後漢・ローマ帝国という大帝国が存在していた。後漢はこの時期、西域に進出して最盛期を迎え、ローマ帝国も五賢帝時代には「 1 」^(A)と呼ばれる空前の繁栄と平和を誇っていた。この両国を結ぶ交易も活発化し、^(B)両帝国の間に位置するパルティアとクシャーナ朝はともに東西交易で繁栄した。

パルティアは、西アジアの西北部からおこり、 2 から独立した。始祖はアルサケスとされ、そのため国名もアルサケス朝パルティアと呼ばれることがある。中国ではパルティアのことを「 3 」と呼んだ。パルティアは、前 2 世紀半ばにメソポタミアを併合した後、 4 に都を定め、東西交易の利益を独占して大いに栄えた。

クシャーナ朝は、2 世紀半ばの 5 王の時代に最盛期を迎え、今日の中央アジア・アフガニスタンから 6 中流域にいたる広い領域をその支配下に置いた。クシャーナ朝は諸宗教に寛大で、仏教も大いに栄えた。紀元前後から起こった大乘仏教^(C)は、クシャーナ朝の保護を受け、交易路を通じて中央アジア・東アジアへと広まった。

また、南インドのサータバーハナ朝や東南アジア最古の国家とされる 7 ，ベトナム中部の林邑などの 8 国家も、 9 における季節風貿易の発展と結びついて栄えた。

しかし、ローマ帝国も五賢帝時代が終わり、3 世紀に入ると軍人皇帝の時代と呼ばれる混乱期に入った。一方、東の後漢は、豪族の台頭や皇帝側近の 10 や外戚の専横の^(D)中で動揺が始まった。さらにパルティアも、ローマ帝国との長期にわたる抗争で衰え始め、3 つの帝国は衰退期へ向かった。

問1 文中の ～ に入るものとして最も適切な語句を下記の語群から選べ。

【語群】

- | | | |
|--------------|-----------|-------------|
| イ. 扶南 | ロ. 禁軍 | ハ. インド洋 |
| ニ. アレクサンドリア | ホ. 南海 | ヘ. 港市 |
| ト. アケメネス朝 | チ. アショーク | リ. パクス・ロマーナ |
| ヌ. 安息 | ル. 宦官 | ヲ. セレウコス朝 |
| ワ. 大苑 | カ. クテシフォン | ヨ. 大西洋 |
| タ. パクス・ブリタニカ | レ. 専制 | ソ. ユーフラテス川 |
| ツ. ガンジス川 | ネ. カニシカ | |

問2 下線部(A)に関連して、前漢の武帝が大月氏と同盟して匈奴を攻撃するため、西域に派遣した使者は誰か。下から選べ。

- イ. 司馬遷 ロ. 張騫 ハ. 班超

問3 下線部(B)について、以下の文中の に入るものとして最も適切な語句を入れよ。

中央アジアのオアシス都市を結ぶ「オアシスの道」の主演として、長距離交易を担ったソグド人の本拠であるソグディアナの中心都市 は、紀元前から有力なオアシス国家として知られていた。

問4 下線部(C)について、2～3世紀ごろ、大乘仏教の教理を体系化したのは誰か。下から選べ。

- イ. バールブル ロ. カーリダーサ ハ. ナーガルジュナ（竜樹）

問5 下線部(D)について、2世紀末に起こった黄巾の乱を30字以内で記述せよ。

問題 2

以下の文章を読み、下の問いに答えよ。

ニューヨーク株式市場における株価暴落に始まる世界恐慌は、次のような経済的影響をもたらした。すなわち、工業生産の急落、企業倒産、商取引の沈滞、そして、1である。

世界恐慌の影響は、経済的範囲を越えて、ヨーロッパ諸国の社会や国際関係にも多大な影響をもたらした。例えば、① 後の第二次世界大戦において同盟関係を結ぶことになるイタリアとドイツでは、市民的自由や人権を無視する国家主義を掲げる政治体制や思想、すなわち 2 が現れた。この時期、日本でも軍部主導の全体主義的な傾向が顕著となった。

経済政策においては、各国は自国経済の浮揚を優先させた。アメリカは、3大統領の下で、銀行の救済、農業調整法、金の流出防止、4を通じた農産物・工業製品の価格調整、公共事業による失業者救済を行った。またイギリスは、連邦内の関税を引き下げ、連邦外の国家に対しては高関税を課すことで、5を結成した。フランスもまた、自国の植民地を囲い込むことで、イギリスと同様に6を築いた。

こうした国際社会の風潮は外交にも影を落とし、1932年以降に開催されたジュネーヴ軍縮会議は成果なく終わり、第一次大戦後に設立された国際連盟の活動を含め、国際協調の動きは低迷した。

問1 1 ～ 6 に入るものとして最も適切な語句を下記の語群から選び、その記号を解答欄に記せ。

【語群】

- | | | |
|-----------------|----------------|-------------------|
| ア. 雇用の増加 | イ. スターリング・ブロック | ウ. 全国産業復興法 |
| エ. フラン・ブロック | オ. ファシズム | カ. 反トラスト法 |
| キ. ドル・ブロック | ク. 失業者の増加 | ケ. フランクリン・ローズヴェルト |
| コ. セオドア・ローズヴェルト | サ. カリブ海政策 | シ. サンディカリズム |

問2 下線部①について、以下の問いに答えよ。

- (1) ドイツでは、1932年の選挙で第1党に躍進したナチ党が、1933年1月にヒトラー内閣を樹立した。その後のヒトラーはわずか半年で一党独裁体制を築き上げるが、その過程で国会の立法権を政府に与える法案を成立させた。この法案はなにか。下から選べ。

ア. 四月テーゼ イ. ドーズ案 ウ. 全権委任法

- (2) イタリアのムッソリーニ政権が、恐慌による国内の経済危機から国民の目をそらすため、1935年に侵攻し、翌年に併合したのはどこか。下から選べ。

ア. エジプト イ. エチオピア ウ. コンゴ

- (3) 以下の文中の A と B に入るものとして最も適切な語句を入れよ。

1936年、選挙でスペイン人民戦線派が勝って政府を組織すると、軍人の A による軍事反乱が勃発し、ドイツ・イタリアは反乱軍に武器援助を行った。この内戦の過程で、ドイツ・イタリアは、 B とよばれる提携を強めた。

問題 3

以下の文章を読み、下の問いに答えよ。

民族大移動による社会と経済の混乱によって、西ヨーロッパの商業と都市はいったん衰え、代わりに農業経済を基盤とする社会が展開した。^①度重なる外部勢力の侵入から生命財産を守るため、自力で外敵と戦い、地域の防衛にあたった諸侯や大司教・司教・などの大領主は、王権に対して自立性を強めた。また、小領主である騎士もが軍事的に優位であることから、その社会的地位を向上させた。

聖職者以外の有力者の間においては、自らの地位と所領を確保して秩序を維持するため、互いに義務を負う契約によって封建的主従関係^②が結ばれた。すなわち、主君が家臣にを与えて保護する代わりに、家臣は主君に忠誠を誓って軍事的奉仕の義務を負った。契約は託身と宣誓からなるによって成立したが、家臣の立場は強く、契約事項をこえて主君に従う必要はなかった。

^③大小さまざまな領主の所領は、荘園を単位として構成されていた。荘園では、耕地は領地直営地と領主が農民に貸与した農民保有地からなっていた。農民はと呼ばれる不自由身分で、の自由が制限され、結婚税や死亡税を領主に納める義務を負い、さらに、領主直営地で労働する義務であるや、農民保有地からあがる収穫物をとして納めるの義務が課されるなど、有力者間の契約関係に比して様々な制約を受けた。

問1 文中の～に入るものとして最も適切な語句を下記の語群から選べ。

【語群】

- | | | | |
|--------|--------|-------|----------|
| ア. 片務 | イ. 朝貢 | ウ. 双務 | エ. 移動 |
| オ. 賦役 | カ. 臣従礼 | キ. 封土 | ク. 貨幣 |
| ケ. 修道院 | コ. 騎兵 | サ. 農奴 | シ. 重装歩兵 |
| ス. 書院 | セ. 入会地 | ソ. 貢納 | タ. 三跪九叩頭 |
| チ. 平民 | ツ. 雑徭 | テ. 地代 | ト. 兵役 |

問 2 下線部①について、8 世紀から 12 世紀までの間にノルマン人がヨーロッパで建てた国はどれか。下から選べ。

ア. ノヴゴロド国 イ. モラヴィア王国 ウ. ハンガリー王国

問 3 下線部②について述べた以下の文中の に入るものとして最も適切な語句を入れよ。

封建的主従関係は、ローマの恩貸地制度とゲルマンの に起源を持ち、封建諸侯が自立的支配権を主張して、国家の求心力は失われる傾向があった。

問 4 下線部③について、荘園領主がどのようにして荘園と農民を支配したのか。次のキーワードを用いながら 80 字以内で説明せよ。

(キーワード：不輸不入権 領主裁判権)

問題 4

文中の [1] ～ [10] に入るものとして最も適切な語句を、下記の語群から選べ。

中央ユーラシアの草原で遊牧を生業としていたトルコ系の人々は、9世紀頃から戦争捕虜となったり、あるいは奴隷として購入されたりして、アッバース朝やサーマーン朝などの軍事力として重用されるようになった。サーマーン朝に軍人として仕えたトルコ系の人々が、アフガニスタンで自立して建てたのが [1] である。この政権は、西北インドへの侵入と略奪をくりかえした。

10世紀から11世紀になると、中央ユーラシアのトルコ系の人々が集団でイラン高原へと進出した。気候が温暖化し、人口が増大したことが移動の原因とされる。このうち、スンナ派のムスリムとなったトゥグリル・ベクの率いるセルジューク朝は、アッバース朝のカリフの要請に答える形でブワイフ朝軍を破って、1005年にバグダードに入った。この時、トゥグリル・ベクはカリフから [2] の称号を授けられた。この後、この称号はムスリムの支配者に多く用いられるようになった。

セルジューク朝は、シーア派の [3] に対抗して、領内各地に [4] を設けてスンナ派の神学と法学を奨励して、学問の育成に努めた。また、この王朝の時代に、多くのトルコ系の人々が [5] の防衛線を突破してアナトリア高原に入り込み、各地に拠点を作り、後の [6] 成立の下地となった。

13世紀には、中央ユーラシアから、モンゴル系の人々が西アジアへ進出してきた。チンギス・ハンの率いた軍は、セルジューク朝に代ってその領域の大部分を支配していた [7] を倒した。ついで、フラグの率いた軍が再度西アジアに入り、バグダードを占領してアッバース朝を滅ぼした。

フラグとモンゴル系・トルコ系の遊牧民を主とする軍は、そのままイラン高原にとどまり、 [8] を建て、エジプトの [9] と敵対した。彼らは元来ムスリムではなかったが、 [10] の頃までには、多くがイスラーム教を受け入れた。

これ以後、イラン高原やその周辺では、モンゴル系・トルコ系がその武力を背景に政治権力を握り、イラン高原の都市名家出身の文官が財務や行政の面で政権を支えるという政治体制が長く続くこととなった。

【語群】

イ. ガズナ朝	ロ. ブハラ・ハン国	ハ. ムセイオン
ニ. スルタン	ホ. ファーティマ朝	ヘ. 大アミール
ト. ビザンツ帝国	チ. ガザン・ハン	リ. マムルーク朝
ヌ. シンガサリ王国	ル. アンコール朝	ヲ. エセン・ハン
ワ. ゴール朝	カ. イル・ハン国	ヨ. ホラズム朝
タ. サファヴィー朝	レ. ムガル帝国	ソ. オスマン帝国
ツ. アイユーブ朝	ネ. マドラサ	